「さっぽろまちづくりトーク」　市長メッセージ・座談会要旨

【市長メッセージ】

○さまざまな問題にこれまでの２期８年取り組んできた。今日は、これからの４年間、しっかり市政を運営するための計画を作りたい、そのための新しい中期的なまちづくり計画を皆さんと一緒に考えたい。

○私がこの８年間掲げてきた目標というのは、市民が主役のまちづくりをしていこうということに尽きる。これまでの行政と市民との関係である、ものを与える、あるいは与えられる、要求する、要求に応える、こういう形ではなくて、私たち自身が、自分たちの欲するところをどうやったら実現できるのかということを考えていこうと、自分たちでやれることは自分たちでやり、そして私たちがお互いに支えあっていく、そんな地域社会といったものを作っていくということが大事である。

○そのために、自治基本条例、市民活動促進条例、子どもの権利条例をつくり、そしてそれを基にしたまちづくりをしていくということで、この８年、さまざまな活動を保証し、場を提供し、人々のネットワークを広げていく、そんな取組をしてきたところ。

○自分が本当に実現できている、そのように思えるまち、自分たちで作っているという気持ちを持てるまち、それがきっと一番愛着があり、そこに住んでいる人たちと共に助け合うことができる、そんなまちではないか思っている。

○市民が主役のまちづくり、そして市民の力みなぎる、文化と誇りあふれるまち札幌というものを、標榜し、目標に掲げて取り組んできたが、今日は、皆さんでもう一度お考えいただき、ぜひご意見を頂戴したいと思っている。

【座談会】

［これからのまちづくりの視点］

吉田氏　このまちの価値をちゃんと整理して発信したり伝えたりすることが、もっとできるのではないか。新しい取組として、札幌をスイーツのまちにしようという運動を行っている。スイーツが札幌の価値を発信する主役になれることも最近実感している。

池田氏　企業経営上、重要なのは北海道にある素材と人材。本州の大資本と競っていくにはこの地域の魅力、特色が私たちの武器になる。市長がよくいう「市民力」と同じように、社員も企業の主役でなければならず、「まちづくり」と「企業づくり」はイコールだ。

中島氏　北海道は、よそ者に対してとても寛容で、そういう自由な雰囲気が非常に好き。しかし、共同体というものの絆が流動的である。そこで人と人が、自分が意味ある生き方をしていると思えるような場所、関係性というものをもう１回、この北海道、札幌で作ることができるのかを考えながら、いくつかの事をやってきた。

中島氏　この１０年間くらい、自助の部分ばかりが言われてきた。そうではなくて、公助と共助の部分をしっかりとリンクさせていくことが恐らくこれからのビジョン。

[市民力、企業力]

池田氏　会社というのは、まちの縮図だと思う。共通するのはどんなに立派な理想を掲げても、実際に市民、社員が山彦のように響いてこなければならない。だから社員が主体の会社は力強い。具体的な実践として、元気な挨拶、決まりを守ること、掃除の３つ。すべて意味があり、そのようなことから社員力を少しずつつけていく。扱う商品も地元のたくさんの素材を使うことによって非常に優位に立てる。ただ、トータルとして北海道の、札幌のブランド力がどうしても必要。

上田市長　企業力、社会的にどういう存在であるのかが、商品に対する個性が生まれるポイントだと思う。そういう個々の方々の努力が、本当に真面目に取り組んでいることが、まちの魅力に絶対発展できる。

[さぽーとほっと基金]

池田氏　（さぽーとほっと基金について）身障者の「万人の響」というコンサートに協力させていただいた。感謝の手紙をいただいたりいろんなことが始まり、社員がそのことでいろんな新しい世界をつかみ始めている。貢献というのはそういうことであり、それがまた社員の力になり、もっと大きなパワーになっていく。違った考え方や違った世界と具体的に接点を持たせることができ、そこから得ることはとても大きい。

上田市長　（さぽーとほっと基金は）市民活動促進条例を作った時に、従来の補助金ではなく市民同士で支え合うことはできないだろうかと思い、設けた。活動に参加できなくても、資金の提供で自らが参加したと同じ気持ちになれる。

[まちづくりセンターの活用方法]

中島氏　（まちづくりセンターについて）地域ニーズなどをしっかり吸収して、それをどう政策につなげていくかという、そういう主体性が必要。まちの人たちのやる気、主体性をどう引き出すのかという能力がこれから公務員に試されている資質だと思う。

上田市長　まちづくりセンターは行政の横の関係、コミュニティを作っていく拠点にしたいと考えた。８年経って少しずつ変わりつつある。センターの所長は、地域の方々と良いコミュニケーションをとれる、そういうスキルを持った人、市民との対話能力、情報吸収能力、自分を伝える能力を持つ人が望ましい。

[10 年後の札幌に重要なこと]

池田氏　10 年後は、女性たちが活躍する舞台というのが一番望まれる。

吉田氏　私も子育てをしながら仕事をしている。女性たちが働くためにいろんなサポートも実際必要なのかと思う。

上田市長　社会福祉的な側面と経済的な側面から言っても、女性が働いて自分が社会との接点を持てる前向きな社会を作っていくことがものすごく大事。当然働きやすい環境を作っていくことを進めていかなければならない。

[スポーツとまちづくり]

上田市長　オリンピック以外にもいろんな総合冬季大会、アジア大会や世界選手権などもある。人が交流するのにもとても大事なイベントだと思うし、子どもたちも刺激されて選手になりたいと思えるような、質の高い競技大会を誘致していくことは大切なこと。カーリング場が来年できるので、カーリングの世界選手権大会誘致に手を挙げている。

中島氏　スポーツはもう少し身近なものも必要になっていくのだと思う。発寒商店街でも語呂の合う和寒町と交流し、和寒で盛んな玉入れをやろうとしている。これは子どもから大人までいろんな人が参加できる窓口になる。

池田氏　私が子どもの頃、札幌で世界大会があった次の年から子どもたちのウェアがカラフルになってすごく感銘したことを覚えている。そういう世界大会から刺激を受けて良いものもいっぱい生まれてくる。どんなささいなものでも世界大会、いろんな国の人たちが来てくれる大会を誘致する運動を市民とともにやりたいなと思う。

[札幌駅前通地下歩行空間と創成川公園]

池田氏　創成川の公園などいろんな所にオブジェを設置したり芸術的な物を展示し、子どもたちがそういった感性に触れていく場面が多いので、そういう方向に向かうのはとてもありがたい。札幌の学校でも、空間も含めて子どもたちが発想豊かになるような学校に改築してもらうことで豊かな子どもたちが育っていくのではないか。

上田市長　駅前の賑わいと大通の賑わいがつながり、東西の地下鉄のコンコース、創成川公園を含み、創成川イーストという文化領域を新しく作っていく、というダイナミックな都市の連携ができ、先人が苦労していろんなまちづくりをしてきたものが１本につながっていく。そういう札幌駅前通地下歩行空間の重要性を、本当に大事に、大事に、これから使いこなしていきたい。

中島氏　これまでの建築、都市設計は目的や機能すべてが上から設計され、意味づけられているようなデザインややり方だった。しかし現代の建築家たちは原っぱが必要だという。いろんな主体性というものが生まれてくる、そういう空間の設計のあり方というのが重要だということを議論している。いろんな主体がそこで引き出される、創発性があるような環境や空間を整えていくことが大事。そういう空間に地下空間や創成川がなっていけばと思う。

上田市長　私も子ども議会で、子どもたちがジャングルジムなどが設置された公園より原っぱがほしかったという意見を聞いたことがある。全部作り上げた公園など要らなかったという。市民にとって満足でもあるし、たくさんお金を使わなくても満足度が高い、これが一番いい行政だと思う。そういうことがやはり創造性を刺激し、発揮する場所を

提供する、チャンスを提供することになる。これからの行政がやるべきこととしてとても参考になる。
吉田氏　そういう意味で、地下歩行空間は市民がそこで発想して、発信して、あそこは玄関口でもあるから、札幌の市民力をアピールするいい場所になっていく。

［まとめ］
池田氏　何か不便を残しながら会社を経営しているが、そういったものを取り入れていくことによって参加意識が非常に強まっていくのをひしひしと感じている。不便だから直せではなくて、不便だからこそ自分たちのいい形で活用していこうということが大切である。
中島氏　政治学では、自由というものを、積極的自由と消極的自由の２つの概念に区分。何々からの自由（消極的自由）を進めていけば人々は孤独になっていく。重要なのは何々への自由（積極的自由）。自分が生きている意味があると思えるような役割、そして空間というものを積極的に引き受け、その中に参加することによって生き甲斐を見出していくような、市長のいう「市民力」、私の言葉でいうと「住民力」というものをつけていかないと社会がもたないと思う。
上田市長　池田さんが言われた不便さを残すというのはとてもいいと思う。現代社会は便利さの追求によって失った物がたくさんある。それと大都会の匿名性がコミュニティを破壊し、自分が本当に必要としているものさえも失ってしまう。我々は求めるべきもの、本当に自分の真の豊かさというものが何だったのかということをしっかりと考えたいと思う。
吉田氏　今日の座談会からはいくつかのキーワードが見えてきた。人との関係性の中で自分の生きる場所をしっかりと作っていくということがまちづくりの重要なポイント。山彦が呼応し合うような札幌のまちになると本当にすばらしいと思う。またその１つのキーワードがプラス発想なのかなと思った。やはり明るい気持ちで、自分たちでやっていこうというようなプラスの発想というのがすごく大事と感じた。